ここまでわかった市原の遺跡　第3回発表会

いちはら最古の

貝塚とムラ

天神台遺跡の発掘調査によって
何がわかったか

市原市埋蔵文化財調査センター

ごあいさつ

温暖な気候に恵まれた房総半島には、古来より多くの人々が暮らしてきました。その中央に位置する市原の地にも、豊かな森と養老川や海がもたらす大自然の恵みを求めて、たくさんの人々が集い、先人たちのその営みの痕跡（こんせき）は遺跡となっていまも市内各地に残されています。とくに、上総（かずさ）国分寺跡を擁するここ「国分寺台」の地には、西広（さいひろ）貝塚・神門（ごうど）古墳群・稲荷台（いなりだい）1号墳など、全国にその名が知られる遺跡が数多くあり、文化や政治の中心地としての役割を担ってきました。

「天神台（てんじんだい）遺跡」は、国分寺台にあった遺跡の中でもとくに規模が大きく、時代や内容も多岐にわたる複合遺跡です。このうち縄文時代に関する部分の調査報告書が完成したため、その成果を発表し、主な出土遺物の特別展示をあわせておこないます。

舞台はおよそ七千年前、気候が今より温暖で海はずっと内陸地まで入り込んでいた時代です。ここに残された市内最古・唯一の縄文早期貝塚は、この地で初めて海と関わりをもった人びとの生活の証として重要です。縄文早期の貝塚は千葉県内でも数少なく、今後、東日本を代表する遺跡として知られることでしょう。さらに遺跡には、早期の住居跡や炉穴（ろあな）・集石（しゅうせき）などが多数あり、とくに最大13ｍを超える複数の大型住居跡の発見は注目されています。ムラは前期前半まで営まれ、立地や形態の変遷（へんせん）をたどることができます。1,400点を超える貝ビーズなど、全国でも珍しい遺物もみつかりました。長期間の調査成果を、ぜひご覧ください。

はじめに

本書は、「ここまでわかった市原の遺跡」の第3回として「いちはら最古の貝塚とムラ」をテーマに開催する発表会と特別展で、天神台遺跡の調査成果をできるだけわかりやすくお伝えするために作ったものです。この企画をなすに至るには、非常に長い期間の発掘調査とその後の整理作業が必要でした。この間、多大なご尽力をいただきました文化庁、千葉県教育庁、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査会をはじめとする関係各位、そして気の遠くなるような長い期間の発掘調査や整理作業に従事していただきました方々に、あらためて深く感謝の意を表します。

また、今回の企画と本書の執筆にあたっては、多くの機関や方々にご協力いただきました。ここにお名前を記し感謝いたします。（順不同・敬称略）

佐賀市教育委員会・御代川町浅間縄文ミュージアム・沼津市文化財センター・船橋市飛ノ台史跡公園博物館・千葉市加曽利貝塚博物館・千葉県立中央博物館・財団法人千葉県教育振興財団・富士見市教育委員会・西田　巌・堤　孝・池谷信之・栗原薫子・村田六郎太・森本　剛・黒住耐二・西川博孝・上守秀明・小笠原永隆・早坂廣人・金子浩昌

◆ 発表会・特別講演 ◆
2013年3月2日（土）
市原市勤労会館（youホール）・多目的ホール
9:20 ～ 12:10

◆ 講師 ◆
金子浩昌氏（東京国立博物館特別研究員）
「縄文時代早期の人と動物の関わり」

◆ 関連資料展示・解説 ◆
2013年3月2日（土）
市原市埋蔵文化財調査センター
13:30 ～ 16:00

◆ 期間延長展示 ◆
2013年3月4日（月）～ 6月28日（金）
9:00 ～ 17:00
ただし土日・祝日を除く

古墳の下からみつかった縄文時代のムラ

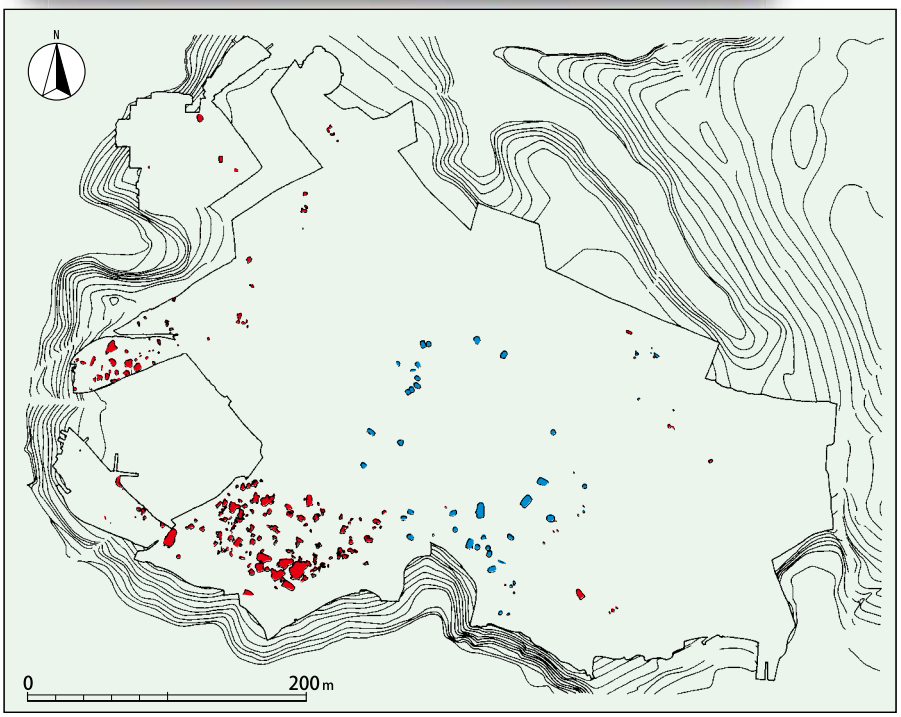
天神台遺跡・諏訪台古墳群は、国分寺台地区遺跡の南西端部に位置する大規模な遺跡で、とくに弥生時代から古墳時代、さらに奈良・平安時代へと続く300基にもおよぶ墳墓群と、弥生時代から古墳時代そして奈良・平安時代にかけての500軒にもおよぶ住居跡・建物跡からなる集落として有名です。調査では、遺跡の上部に位置するこれら古墳群や集落跡から発掘していきましたが、その下部に至る段階で、縄文時代の遺物が多数みつかり、貝塚や竪穴住居跡・炉穴とよばれる遺構もあることがわかりました。そして調査が進むにつれて、これらは大規模な縄文時代のムラであることが明らかになったのです。

1は、最も古墳が密集していた調査区の航空写真です。調査区全面に隙間なく古墳群が展開しています。2は方形の溝をめぐらせた墳墓の写真です。墳墓の盛土の下から貝塚の一部が顔をのぞかせています。これらの地区では、縄文時代のムラはその多くが墳墓の下に位置し、厚い盛土に覆われていたため保存状態はかなり良好でした。

1 調査区の航空写真

2 方形の溝をめぐらせた墳墓

縄文時代早期と前期のムラ



早期後葉　前期前葉

天神台遺跡からみつかった縄文時代のムラは、早期後葉と前期前葉のものにわけられます。その分布範囲は、それぞれ直径200mほどにもなり、かなり規模の大きなものとみることができます。興味深いのは、二つの時期のムラが、左図にみるようにほとんど重複していないことです。天神台遺跡の位置する台地はかなり広大であったため、早期のムラがなくなった後、この地に現れた前期の人びとは先住民の痕跡を感じとり、あえてこれを避けるようにムラを築いたようです。この時すでに、数百年ほどの時間が経過していましたが、地面の上には先住民の残した貝や石・土器などがまだ散らばっていたのかもしれません。

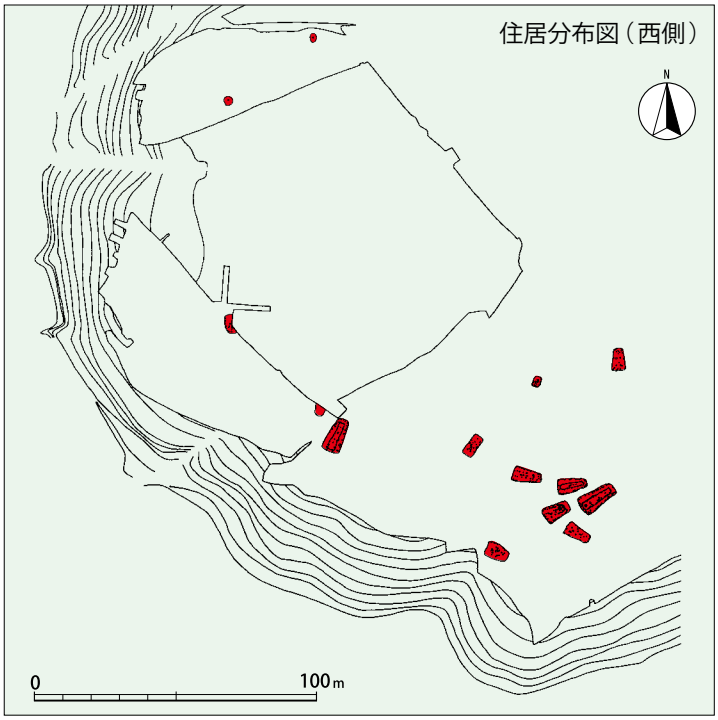
大型住居のなぞ

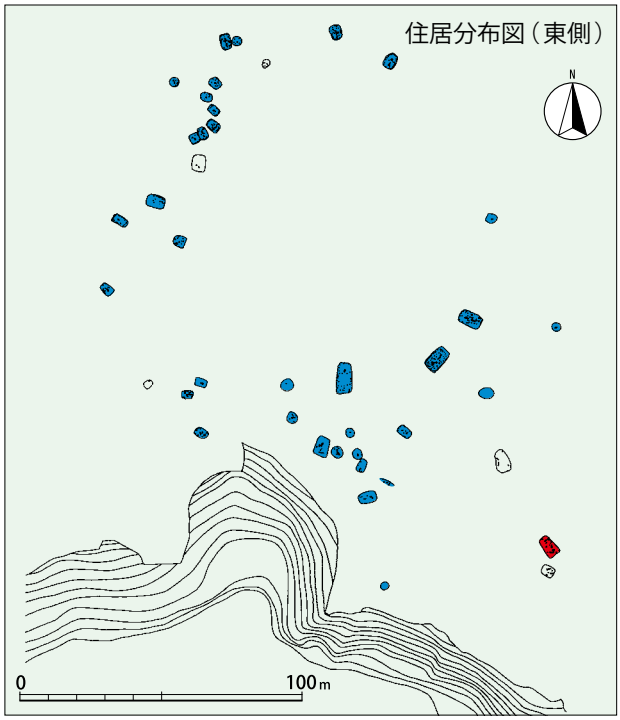
天神台遺跡からは、計60軒の竪穴住居跡がみつかり、このうち時期の明らかなものは、早期17・前期34軒ありました。このうち最も注目されたのは、早期の長軸10ｍを超える大型竪穴住居跡が複数みつかったことです。最大13.5ｍ、かたちは長台形で、掘り込みは1ｍ以上もあり、柱穴は中央部よりと壁際に規則的に並んでいます（写真1）。ただし、建物の中に炉はなく、調理施設は別にあったようです。2の写真は前期のもので、こちらは長軸およそ9ｍ、長方形で中央部に炉があります。

一般的には、「大型住居」はムラの集会場や作業場など、特別な場所と見られがちです。ムラの中心に位置していたり、5～6ｍ規模の通常の住居跡とは異なる構造物が中にあったりする場合が多いためです。しかし天神台遺跡の大型住居は、早期の場合は全体の半数以上の10軒もあり、決して特別な存在とは言えません。また、分布位置も一部の地区にまとまっていて、それぞれをある時期のムラの中心的な存在とするには無理があります。一方、前期には大型住居は3軒と数がずっと少なくなり、かたちも他のものが方形から円形であるのとは異なります。住居跡の分布も、中央に空白地帯（広場）をもつ環状の形態を示すようになります。早期から前期へと時が流れ、居住形態や大型住居の役割が変化し始めた可能性があります。早期には、血縁のつながりの強い複数家族が寄り集まって1 軒内に住むかたちだったのが、前期には、家族単位を核として規模の小さな1 軒の住居に住み、複数の集団が寄り集まってムラを形成するようになっていく。ムラを構成する集団のあり方や家族構成、居住形態を考えるうえで大型住居のあり方は重要な意味をもっています。

1 長軸 13.5ｍの竪穴住居

2 中央に炉のある住居





早期後葉　前期前葉　時期不明

二つの調理施設・炉穴と集石

天神台遺跡からみつかった縄文早期後葉の住居跡には、炉をもつものがほとんどありません。この時期、屋内に調理施設をもつ習慣がまだなく、人びとは屋外の施設を利用していました。これが、「集石」と「炉穴」と呼ばれる遺構です。集石遺構は、直径1mほどの範囲内に焼けた石がまとまっているもので（写真1）、しっかりと穴を掘っていないため、4例が確認できたにすぎません。しかし、前述の大型住居跡の床面近くから検出されたものが他に2例あること、18万点・8.6トン（整理箱で1,200）もの焼けた礫がみつかっていることから、当時の調理形態としては一般的であったようです。加熱した石の上を草や木の葉で覆い、その中に獣や魚の肉を入れて蒸し焼きにしたとみられます（写真2）。一方、炉穴と呼ばれる遺構は、およそ200か所・500基みつかっています。長軸2～3mほどの楕円形の穴で、その片側に強く焼けた跡がみられます（写真3）。稀に燃焼面側に天井部や煙だしの穴が残るものもあり（写真4）、土器を使った煮炊きのほか、獣や魚の肉を燻製にしたのかもしれません（図）。また、これら炉穴の周囲に竪穴状の掘り込みがあるものもみつかっています（写真5）。風よけ用の施設があったのかもしれません。

1 集石遺構

2 加熱した集石での調理実験（肉の蒸し焼き）
（写真：浅間縄文ミュージアム提供）

3 一般的な炉穴の検出状況

炉穴の使い方のイメージ（燻製加工用）
（図：飛ノ台史跡公園博物館提供）

4 煙道のある炉穴（燃焼面に完形土器が出土）

5 周囲に竪穴のある炉穴

コラムNo.1
～ 天神台ムラの住人 ～

天神台遺跡から1体の人骨がみつかっています。ムラに住んでいた、現存する唯一の「住人」です。骨の鑑定から、20歳代の若い女性であることがわかりました。『彼女』は、早期のムラの中心部近くにあった炉穴を利用した墓穴におさめられていました。埋葬姿勢は「屈葬」と呼ばれるもので、腕と足が強く曲げられています。また、穴の中に埋葬されたあとすぐに貝殻で覆われたようで、その結果骨が溶けず、7,000年もの時を経て現代にその姿を現わしました。骨の鑑定では、ほとんどの歯には強い咬耗の跡がみられ、とくに犬歯や切歯は歯冠部全体がすり減っているそうです。年齢的にみて、日常的にかなり歯を使う食生活や仕事（皮なめしなど）をしていたと考えられます。縄文早期の人骨は全国的にみてもあまり例がなく、天神台遺跡の『彼女』は今後も注目の的になることでしょう。

貝殻条痕文から縄文へ

縄文時代早期は、土器に見られる紋様の特徴から大まかな時期を区分しています。古いほうから、撚糸文系→沈線文系→条痕文系と呼び、最後の条痕文系土器が天神台遺跡の主要な時期の一つです。ハイガイなどフネガイ科の貝の縁辺で並行する線を描くもので、「貝殻条痕文」と呼んでいます（写真1）。条痕文は、土器の内外面の上から下までみられるもの、部分的にみられるものなど様々で、これをアクセントに他の紋様を組み合わせて一つの土器のデザインとします。器のかたちは基本的に上下に長い「深鉢形」と呼ばれるもので、これ以外の形の土器はほとんどみられません。底の部分は急に細まり、尖底と平底のものとがあります。口の部分は平らなものが主流ですが、写真3のようにやや波形になるものもあります。

1 貝殻で紋様をつけた「貝殻条痕文」

3 縄文早期後半の土器

2 よった糸で紋様をつけた「羽状縄文」

4 縄文前期前半の土器

一方、縄文前期の前半には、「羽状縄文系」という複雑な縄目を組み合わせた紋様が主流となる土器が流行します（写真2）。繊維をよった縄目の種類は多様化し、これらを組み合わせた紋様は複雑さを極めます。条痕文がそうであるように、縄文も土器の口の部分から底の部分、さらに底面にもおよび、その徹底さには驚かされます。器のかたちや大きさも多様になり、深鉢形のほか、鉢形や片口なども現れます。写真4のように、口の部分が大きく波打ち派手な装飾をもつものが多くなります。早期から前期へ、時の流れとともに土器の紋様も、貝殻文から縄文へと大きく変わりました。

コラムNo.2
～よそから来た土器～

縄文時代早期後葉、貝殻条痕文系の土器は、東日本ばかりでなく、九州など西日本にも広く分布します。天神台遺跡からは、この時期、よその地域から来たらしい土器があることがわかりました。右の写真にみる土器は、愛知県など東海地方に特徴的な土器です。器形や紋様の種類が関東地方に主流のものとは異なり、焼成（粘土の焼き具合）や色調、胎土（土器の素地・粘土）も一見して違います。厳密には、胎土の状態（含有鉱物など）を化学的に分析してみなければわかりませんが、土器のみかけだけから判断すると、単に真似て作られたものではなく、東海地方のものが直接持ち込まれたと推定できます。この時期、舟で海流に乗ってここ市原の地までやって来た集団がいたのかもしれません。

希少な縄文早期貝塚

市原市には、およそ40か所の縄文時代の貝塚が知られています。このうちの約8割が後期、2割が中期、前期は皆無、そして早期の貝塚は天神台遺跡以外にはほとんど知られていません。炉穴の窪地（くぼち）などに少量の貝がみつかる事例は幾つかありますが、天神台遺跡のように大規模に広がる貝塚は初めての発見といえます。天神台遺跡では、竪穴住居跡や炉穴の内部に形成されたものが主体で、点在するあり方とはいえこれらは約60か所にもおよび、その分布範囲は径200ｍほどにもなります。遺跡から採集した貝層の総量は整理箱で約600、重量で4トンにもなりました。これらを詳細（しょうさい）に分析した調査成果の一端から、市原で初めて海と深く接した人びとがどのような関わり方をしたのか、未知の縄文早期貝塚の実態に触れてみることにしましょう。

大型の住居内に堆積した貝層

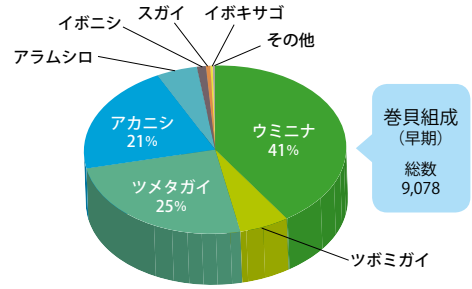
炉穴内に堆積した貝層

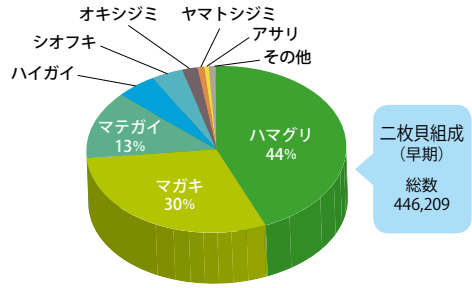
コラムNo.3
～貝殻は語る・縄文海進時の海のようす～

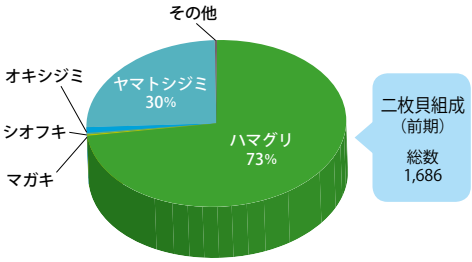
縄文時代のごく初期、最終氷期（ひょうき）のなごりでまだ寒冷だった気候は、早期の後半にもなるとかなり温暖（おんだん）化し、これにしたがって海水面も上昇し始めます。そのピークは縄文前期前半と言われ、東京湾の奥部、埼玉県や栃木県にも谷状の細い海が入り込み、現在では全く海とは縁遠い地にも数多くの貝塚が残されています。谷の奥部にあたる海域には、砂泥質（さでいしつ）の海底を好む貝類が生息します。その代表がマガキとハイガイです。とくにハイガイ（写真）は、亜熱帯（あねったい）系の貝類としても知られ、温かい海の指標（しひょう）にもなっていて、現在日本列島では九州の有明海などにしかみられません。ハイガイは、関東地方では縄文後期にはかなり減少し、古墳時代にはほぼ絶滅（ぜつめつ）してしまいます。水温の低下に加え、ハマグリやアサリの好む広大な砂質干潟（ひがた）の発達により、生息場所がなくなってしまったのが原因のようです。ハイガイは「縄文海進（じょうもんかいしん）」の象徴のような貝なのです。

いろいろな食材

貝　貝塚を構成する貝類は、当時ムラ近くの海がどんな様子だったのか、そして人びとがどんな貝を好んで食べていたのかを教えてくれます。天神台ムラの人びとは、巻貝ではウミニナ・ツメタガイ・アカニシを、二枚貝ではハマグリ・マガキ・マテガイ・ハイガイ・シオフキを多く採っていました。砂泥底性（さでいていせい）のハイガイ・マガキ、砂底性（さていせい）のハマグリ・マテガイが混在していることは、当時の海の様子が一様でなく、やや複雑な様相であったことを示しています。縄文海進が進むなか、海は深い入り江とやや広い干潟が混在する状態だったようです。

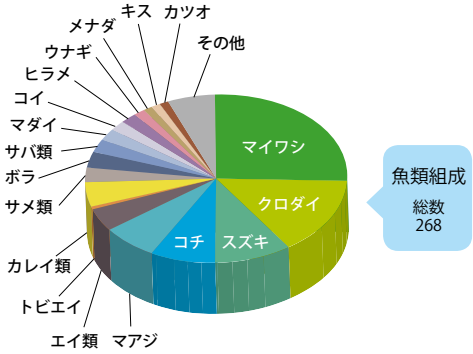


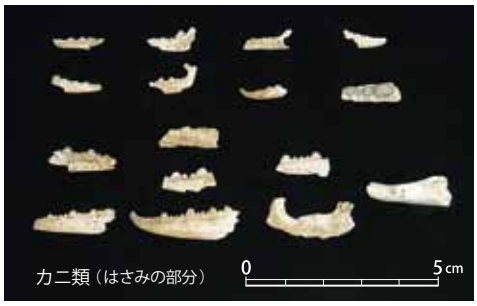




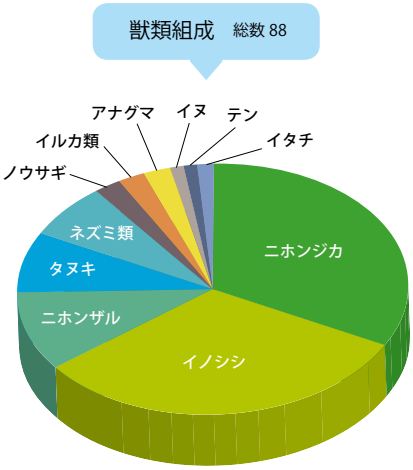
魚　魚類のあり方は、当時の海の様子と漁法（ぎょほう）をある程度教えてくれます。天神台ムラで捕られた魚は、マイワシ・マアジなどの小魚とクロダイ・スズキなどの大物があり、網（あみ）などを使った漁法と刺突具（しとつぐ）や釣り針などを使った漁法があったと考えられます。貝塚からは骨角製の漁具はみつかっていませんが、同じ時期の東京湾対岸にあたる三浦半島の遺跡ではこれらの漁具がたくさんみつかっており、十分その可能性があります。加工痕跡のある骨角類は出土しているので、製品が貝塚に捨てられなかっただけかもしれません。少量ですが、ウミヘビやマダラトビエイの骨が見られることから、今よりかなり水温が高かったことも推定できます。

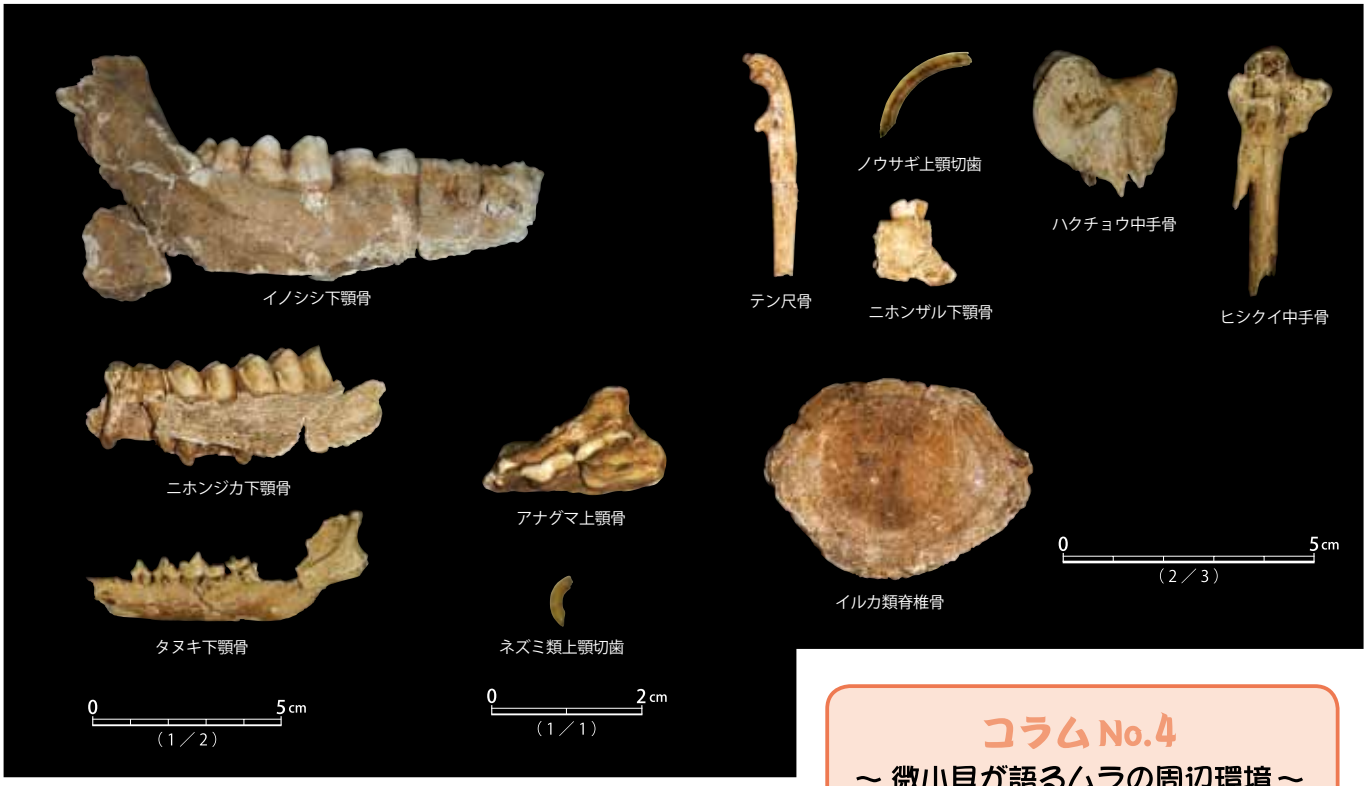
　また甲殻類では、カニ類のうち大型のガザミなども食べていたようで、ハサミの部分がまとまってみつかっています。





獣　獣類のあり方は、当時のムラ近くの森などにすむ動物とこれらの捕獲の様子を知らせてくれます。哺乳類の主体はニホンジカとイノシシで、その割合はほぼ同じでした。黒曜石やチャート製の石鏃、そしてこれらの石器を作った際の残骸などが多数見つかっているので、弓矢を使った猟がさかんにおこなわれていたようです。このほか、ニホンザル・タヌキ・ネズミ類なども比較的多くみられます。少数ですがノウサギ・イルカ類・アナグマ・イヌ・テン・イタチなども、また鳥類ではヒシクイやハクチョウなどもみつかっています。大型の渡り鳥も狩猟の対象だったようです。





コラム No.4
～ 微小貝が語るムラの周辺環境 ～

貝類は海ばかりでなく陸にも生息しています。陸産の貝類とは「カタツムリ」のなかまです。ただし貝塚からみつかるカタツムリは、その大きさが5mmに満たない微小なものがほとんどです。そのサイズの特徴からこれらを「微小貝」と呼んでいます。微小貝類は、その種類によって生息場所が明確に異なります。湿気を好み「林内地」にすむもの、あまり湿気がなくても生活でき「開放地」にすむもの、その中間的な「林縁地」にすむものなど大きく3つに分類できます。したがって、貝塚からみつかった微小貝類の貝種と比率が明らかになれば、貝塚周辺の当時の環境をおよそ知ることができるのです。天神台遺跡での分析結果は、炉穴付近などが比較的開けた環境であった一方、周辺には草地や林が広がる景観だったと推定されています。

微小貝写真スケール：ヒカリギゼル2倍、ほかすべて10倍

貝塚にみる人と動物の関わり

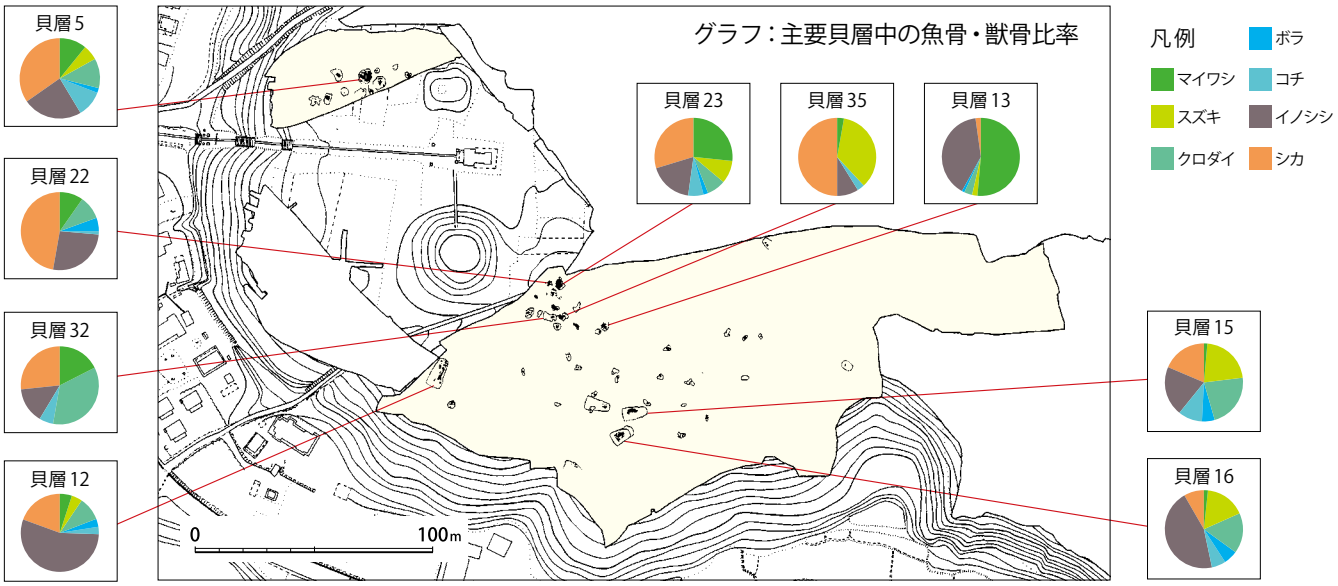
天神台遺跡を形成するおよそ60か所の貝層で、脊椎動物遺体を検出できたのは3分の1ほどでした。規模の小さい貝層を除けば、多くの貝層で検出され、貝層形成と同時に捕獲された魚・鳥・獣類の遺体もまた、この場所に集積されたようです。しかし、貝層によって、これらの魚・鳥・獣類の遺体の量や内容はかなり異なっています。主要な貝層での魚骨・獣骨のあり方を下に図示しました。魚類では、小魚であるイワシ類が多い場所、大型魚種であるクロダイやスズキなどが多い場所と差があります。獣類では、イノシシ・シカが卓越する場所とそうでない場所、また両種の比率も場所によって差がありました。

貝塚には、貝類をはじめ魚類や獣類の遺骸が遺される機会が多く、したがって貝塚は動物に対する扱いの基本を知ることができる重要な遺構と言えます。とくに今回の天神台遺跡の調査では、他の遺跡ではあまり確認できない四肢骨のある部位や脊椎骨が連結した状態のものも多く確認でき、これらの動物の解体方法などを知るための貴重な資料となりました。またこれらの骨のあり方からみて、それぞれの貝層にあった動物の遺骸は、個体の一部のみが残されたものであることを知ることができます。つまり、別にも持ち運ばれているのであって、漁獲・狩猟の獲物は、協力者たちの間で、あるいは、交易・交換のために分配されたのでしょう。その量が、決して少なくなかったことが推測されるのです。貝層の形成された場所は、主に大型の住居跡内や比較的規模の大きな炉穴内など、ムラの中心地とみられるところです。この場所には、ムラを構えた人々の心身の支えとなった食物の一部、あるいは分配されたものの一部が残され、またその霊の鎮まる場所とも考えられたのかもしれません。食べ物を通して、人々の絆を考えさせる場所でもあったのでしょう。貝塚とは、そうした社会的な意味をもつ場所であったことが推測されます。（金子浩昌）

貝層下からみつかった獣骨類

連結する脊椎骨（腰椎）

連結する踵骨・脛骨・距骨・足根骨

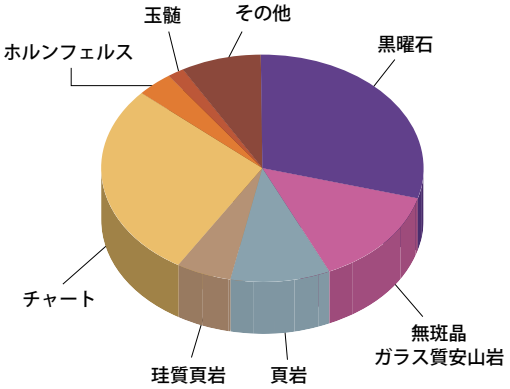


獣を捕る・多様な剥片石器

硬く緻密な岩石を割り、その破片を加工してつくる石器を「剥片石器」と呼んでいます。剥片石器は鋭利な先端や刃部をもつのが特徴です。天神台遺跡からは、早期・前期の遺構中や遺物包含層の中などから、あわせて1,000点ほどの剥片石器類が、これらをつくる際の母体である石核や残骸の剥片類およそ2,000点がみつかっています。剥片石器類の多さは特に注目され、この数は縄文後期の大貝塚である西広や祇園原をもしのぎます。これらの多くは「石鏃」と呼ばれる弓矢の先端につける道具で、イノシシやシカなどに対する狩猟活動が活発だったことを示しています。また、これらの解体に使ったとみられるナイフのような道具類もみつかっています。

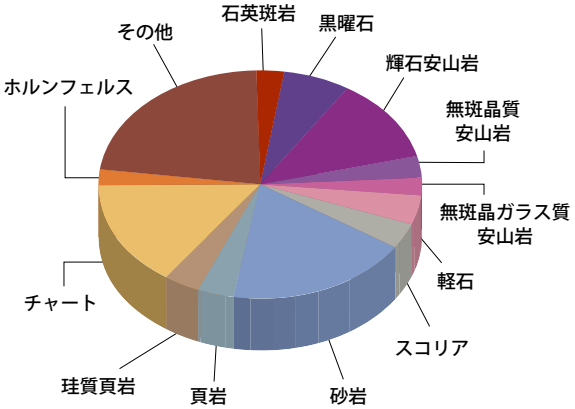
剥片石器類の素材は、黒曜石・チャート・無斑晶ガラス質安山岩・頁岩・珪質頁岩などで、その多くは伊豆諸島・信州・北関東など遠隔地からもたらされたようで、生活必需品である石器の石材をめぐり、活発な交易があったと考えられます。

剥片類の石材組成（包含層出土）



石器の石材組成（包含層出土）

（剥片石器・礫石器）



コラムNo.5
～黒曜石はどこから来たか～

黒曜石は、いわば天然のガラスで、割るとその破断面が非常に鋭利なことから、旧石器時代から極めて利用度の高い石材とみなされてきました。黒曜石は火山岩の一種で、流紋岩質マグマが水中などの特殊な条件下で噴出することで生じると考えられています。したがって、黒曜石は特定の場所にしか産出せず、日本列島にはおよそ70か所が知られています。各地の黒曜石は、その成分が原子レベルでは異なるため、「蛍光X線分析法」という特殊な装置を使ってその測定値を求め比較することで、どこの産地のものかがわかります。近年の研究では、先史時代における日本列島各地での黒曜石をめぐる活発なやりとりの実態が明らかにされつつあります。

天神台遺跡では、主として遺構から出土した黒曜石200点あまりを分析したところ、早期では圧倒的に伊豆諸島神津島産が多かったのに対し、前期では神津島に加え信州産のものの比率が同程度まで高まる傾向がみられ、同一地域でありながら、時間の経過とともに石器石材産地が変化している実態が明らかになりました。

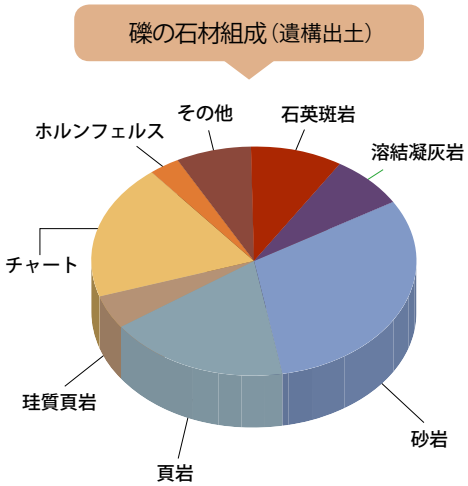
木の実を食べる・多量の礫石器

おおむね拳大ほどの丸い原石を、割らずにそのまま用いるものを「礫石器」と呼んでいます。何かを敲いたり、磨ったりするのに用いたとみられるものが多く、この作業の際に台となる大型の石器もあります。それぞれ、敲石・磨石、石皿・砥石などと呼びます。これらの石器は、主にクルミやドングリなどの実を食べるためにすりつぶすのに使われたものと考えられています（写真1）。当時は、植物質の食糧が重要だったのでしょう。敲石には、その縁辺部や表裏面に敲打痕が、磨石には摩耗痕がみられます。また石皿と呼ぶ石臼のような石器は、中央部が使用の結果大きく窪んでしまっています。

礫石器に使われた石材としては、砂岩・頁岩・チャート・輝石安山岩・石英斑石などが使われています。なかには遠方から運ばれてきたものもあるのでしょうが、多くは遺跡周辺の河床や段丘崖の礫など比較的身近なものを利用していたとみられます。このほか、遺跡内には多量の焼け礫がみつかっています（写真2）。これらの石材も身近なものだったのでしょうが、それにしても多量で、あちこちで拾い集めてムラまで持ち帰るのは相当の労力だったはずです。焼け礫の中には石器も多く含まれていますので、道具から調理用の石へ、または調理用の石を道具へと、無駄なく使い続けていた様子をうかがうことができます。

1　木の実をすりつぶすために使った石器

2　集石遺構の焼けた礫



花和田遺跡からみつかった
焼けたクルミの殻

コラムNo.6
～縄文前期のアクセサリー～

天神台遺跡では、縄文時代前期に特有のアクセサリーが幾つかみつかっています。「玦状耳飾」というもので、かたちは「C」字形をしています。今のイヤリングに似ていますが、耳たぶに穴をあけ、そこに通してひっかけるピアス的な使用法だったと推定されています。本来は、滑石など色あいの美しい石が主流ですが（写真下）、千葉県では粘土を焼いて作った「土製」のものが多くみつかります。表裏面や側面に刻みなど装飾的な加工をしたものもみられます（写真上）。石材に乏しい房総半島では、模造品としてこのような製品をたくさん作っていたようです。

玦状耳飾は、縄文中期以降はほとんど見られなくなり、耳飾りの主流はより装飾性に富んだ「滑車形」タイプのものへと移り変わっていきます。

「貝ビーズ」に魅せられた人びと

天神台遺跡からは、1,400点あまりの貝製の装身具がみつかっています（写真1）。これらの材料にはツノガイ・巻貝・二枚貝の貝殻が使われ、ツノガイ類を加工したものが最も多くあります。直径およそ4mm、厚さは2～3mmほどで、非常に小さな「玉状」です。これらは、ストローのような形をしたツノガイ類をこま切れに加工したもので、素材貝や加工途中のもの、加工残骸などもたくさんみつかっていることから、ムラの中でその加工がおこなわれていたことは明らかです。ここで注目されるのはその形態です。縄文後期の西広貝塚でも、ツノガイを加工した製品がおよそ1,000点みつかっていますが、これらはほとんどが長さ2cmほどの「管玉状」で、玉状のものと比べると長さは10倍ほどあります（写真2）。天神台遺跡のものは明らかにこれとは違い、小さな玉をつくることが意識されているのです。

県内では最近、船橋市の取掛西貝塚から2,000点ほどの製品がみつかりました。東京湾対岸の横須賀市吉井貝塚、埼玉県妙音寺洞窟、長野県栃原岩陰遺跡、滋賀県石山貝塚や佐賀県東名遺跡（写真3）など、その分布は日本列島各地に広がっています。

たくさんの「貝ビーズ」をもつ習慣は、どうやら縄文時代早期の「流行」だったようなのです。この当時の人びとにとって、一見面倒そうにみえる貝細工はどんな意味をもち、彼らは貝ビーズにどんな魅力を感じていたのでしょう。また、この貝ビーズの素材は一体どこで手に入れたのか、どうやってこんなに細かい貝ビーズに加工したのか、謎は深まります。

1　市原市・天神台遺跡出土の貝製品（貝ビーズ）

2　市原市・西広貝塚出土のツノガイ類製管玉

3　佐賀市・東名遺跡出土の貝製品（中央は貝ビーズ）
（佐賀市教育委員会蔵）

コラムNo.7
～貝ビーズの素材は「化石」？～

ツノガイ類は、数十mの深い海に生息しているので、生きた貝を手に入れることは困難です。西広貝塚では、1,000点におよぶツノガイ類のほか、タカラガイやイモガイ類などが700点ほどもみつかり、これらが南房総館山付近の海岸に打ち上げられた貝殻を利用していると推定されています。天神台遺跡のツノガイ類も同様に「打ち上げ貝」を利用しているのでしょうか。この場合、貝ビーズは鋭利な黒曜石のナイフのようなもので輪切り状に切断したのではと考えられますが、遺跡に残された加工途中や残骸資料には、石器でつけた切断痕などはみられません。一方、資料には外から敲いたような痕跡や、折り取ったような面がみられるものがあります。しかし、打ち上げ貝のような生の貝には「ねばり」があり、これに外圧を加え折り取ることは困難です。したがって、西広貝塚ではツノガイの端部を研磨し長い管状のまま使っています。

貝化石層中にみられるツノガイ
（神奈川県横須賀市）

ところで、貝は海岸部だけでなく、かつて海底だった所が陸地化し化石層となった場所にもあり、そこでは比較的容易にツノガイなどを見つけることができます。房総では下総や上総に、対岸の三浦半島にも古い貝化石を伴う地層があります。化石貝の特徴は硬いが折れやすいこと。この性質を利用して貝ビーズに加工した可能性はあると考えています。

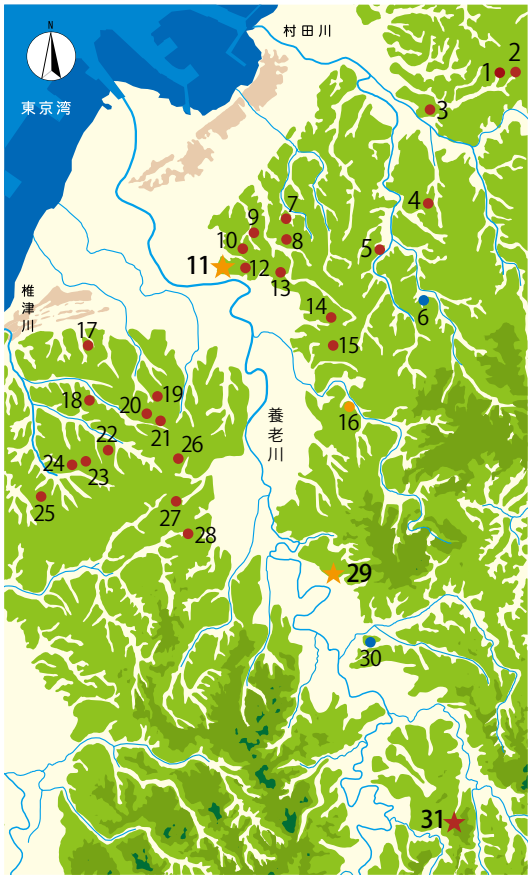
いちはらの縄文早・前期遺跡

市原で早期・前期のものとして知られている主な遺跡は、右の図に示すおよそ30か所と決して多くありません。とくに前期のものはほんのわずかで、それも若干の遺構がみつかっているにすぎず、天神台遺跡のようなムラの全容がわかるものは皆無（かいむ）です。早期の遺跡も多くは炉穴がみつかっているものが主体で、天神台遺跡のようにしっかりとした住居跡や貝塚がみられるものはほとんどありません。このようなことから、天神台遺跡の発見は、市原では大変貴重なものと言えます。

遺跡の分布としては、村田川の中流域、養老川の下流域東岸と西岸など、東京湾岸に面したところに比較的多くみられますが、養老川中流域・上流域などにもわずかに知られています。

このうち早期の遺跡で特に注目されるものとしては、ちはら台の押沼大六天遺跡（おしぬまだいろくてん）、国分寺台の中台（なかだい）遺跡・東間部多（とうかんべた）遺跡、養老川下流左岸の大作（おおさく）頭（がしら）遺跡・野口遺跡、中流域の荻原野（おぎわらの）遺跡・上原台（うえはらだい）遺跡、そして上流域の花和田（はなわだ）遺跡があります。

縄文時代早期・前期遺跡分布図



1 押沼第1・第2遺跡
2 押沼大六天遺跡
3 草刈六之台遺跡
4 下鈴野遺跡
5 新地遺跡
6 文作遺跡
7 千草山遺跡
8 大山台遺跡
9 祇園原貝塚
10 中台遺跡
11 天神台遺跡
12 東間部多遺跡
13 西広貝塚
14 福増遺跡
15 山ノ神遺跡
16 北旭台遺跡
17 小谷遺跡
18 片又木遺跡
19 大作頭遺跡
20 野口遺跡
21 大道遺跡
22 百目木遺跡
23 下椎木遺跡
24 ヤジ山遺跡
25 細山(2)遺跡
26 外迎山遺跡
27 南名山遺跡
28 荻原野遺跡
29 上原台遺跡
30 南総中学遺跡
31 花和田遺跡

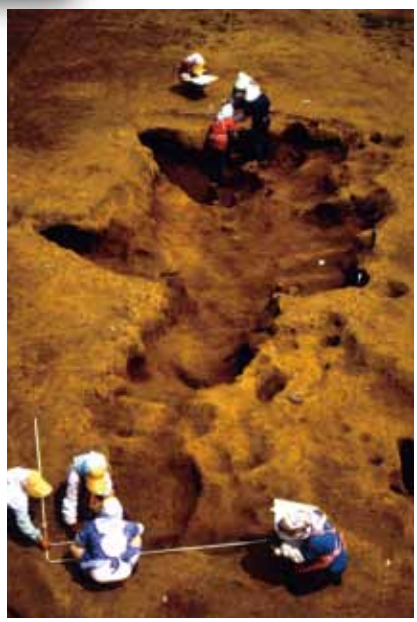
● 縄文時代早期　● 縄文時代前期　● 縄文時代早期・前期

上原台遺跡 ～天神台と同時期の山間部のムラ～

上原台（うえはらだい）遺跡は、養老川の中流域右岸の標高80mほどの台地上にあります。1986・1987年に、ゴルフ場建設に先立って広域に発掘調査されました。その結果、縄文早期の炉穴群と住居跡1軒、前期の住居跡6軒がみつかり、早期には土器・石器や焼けた石が多量に出土しています。

早期・前期ともに、時期的にはちょうど天神台遺跡と同じくらいのムラです。距離的にはかなり離れ（最短距離でも10km以上）、立地的にも天神台が海岸部、上原台が山間部と環境に差があります。ムラの大小はありますが、同時期のムラが市原にあったことは明らかです。それぞれのムラで人びとがどんな生活をし、はたしてお互いの存在を意識するような関係にあったのかなど、興味は尽きません。

奥：縄文早期の深鉢形土器
手前：縄文前期の片口がつく深鉢形土器



炉穴の調査風景
複数基が重複する炉穴　作業している人と比べると、その大きさがわかる

花和田遺跡 ～8,000年前の孤高の集落跡～

標高135mの独立丘陵上に、今から約8,000年前の集落がありました。いちはら最古のムラの跡です。新井浄水場をつくるために発掘調査がおこなわれ、発見されたのです。高滝ダムの水をポンプでくみ上げ浄化し、その落差を利用して市内に送水する、そんな浄水場に最適な場所でした。江戸時代には山岳信仰の塚が築かれます。人里離れたいかにも修験道にふさわしい場所だからです。

そんな絶海の孤島的な山の上に、なぜ縄文早期の人びとは暮らしていたのでしょうか。登るのが大変で不便だとか、今の人々の考えはあてはまりません。

炉穴からは、焼けたクルミの殻もみつかり（P.10）、天神台遺跡と同様、焼けた石も多量に出土するなど、当時の食生活の一部を垣間見ることができます。

また、出土した土器には、沼津市周辺でみられるタイプのものが含まれ、その一部はこちらに運ばれてきた搬入品の可能性もあります。はるか昔の人びとのネットワークはあなどれません。

絶景のムラの跡（南から）

発掘された住居跡　2軒が重複する

縄文のムラの上にあった江戸時代の三山塚

塚の盛土を取り除くと
縄文時代の住居跡などが姿を現した

花和田遺跡の土器
底は平らではなく「尖底」である

斜面部の調査風景　焼けた石などがたくさんみつかった

住居跡の調査風景

市原市埋蔵文化財調査センター
〒290-0011　千葉県市原市能満1489
TEL 0436-41-9000
www.city.ichihara.chiba.jp/~maibun/index.htm

ホームページも公開中です！

まいぞう

市原市埋蔵　検索

発行日：2013年3月2日
編集：市原市埋蔵文化財調査センター
発行：市原市教育委員会